

唐招提寺所蔵重要文化財《東征伝絵巻》全巻復元模写
-図像復元及び料紙再現の研究について-

甘 甜

(東京藝術大学保存修復日本画研究室)

本研究では、唐招提寺所蔵の重要文化財《東征伝絵巻》の全巻復元模写を目標とし、初年度である令和7年度においては、原本の図像研究および料紙加工技法の解明を目的として、実技を中心とした研究に取り組んだ。
今年度の研究進捗については、下表のとおり簡潔に整理した。

	研究計画	研究進捗
2025年2月	高精度画像データ、修理報告書の申請の申請	高精度画像データ、修理報告書の申請の申請
2025年4月～	・図像研究(人物・建造物・植物の表現様式を整理する) ・作風分析(模写練習で作風を習得する)	
2025年6月	・原寸大写真の出力 ・料紙の調達(京都の紙漉屋に依頼する)	高精度画像データ、修理報告書の貸出手続き
2025年7月		原寸大写真の出力
2025年9月	打紙アトリエの準備(御影石、和紙の干し場など)	打紙道具の準備(御影石、木槌、挟み紙など)
2025年10月～	料紙の実技研究、サンプルの制作	・打紙実験、サンプルの制作 ・第一巻の上げ写し開始
2026年1月	復元案の一回目検討 (所蔵先と美術史研究者の意見をもとに制作に進む)	部分彩色復元案の制作
2026年3月	料紙の選定と加工技法の整理	・第一巻の上げ写し完成 ・料紙の調達

6月中旬、唐招提寺長老ならびに執事長のご許可を得て、TOPPAN株式会社より高精細画像の貸与を受けた。あわせて、平成解体修理を担当した修理工房である株式会社修美より、修理報告書の提供を受けた。
7月中には全五巻の原寸大出力を行い、アトリエへ搬入した。

9月以降は、打紙実験の準備として木槌および御影石を用意し、「楮紙5匁」「楮紙6匁」「楮紙7匁」などの和紙を用いて試験を行った。叩く際には、5枚程度を重ね、その間に乾燥用の挟み紙を挟み、5.5cm×7cmの各種類の打紙サンプルを作成した（図1、図3）。

また、作風の把握および図像復元の手順として、線描抽出（上げ写し）作業を行うこととした。10月には上げ写し作業の開始と並行して打紙実験を実施した。

1月には、修士課程において現状模写を行った場面の一部について、想定復元模写を試みた（図4）。

令和7年度の図像復元および料紙再現に関する研究により、《東征伝絵巻》は厚みのある純楮紙に打紙加工を施した滑らかな料紙上に描かれている可能性が高いことが明らかとなった。打紙実験の結果、下地塗布及び打紙処理のみでは絵具や墨の滲みを十分に抑制する効果が限定的であることが確認され、ドーサなどの滲み止め処理を併用する必要があると判明した。

本実験結果を踏まえ、原本に近い加工方法としては、まず厚みのある楮紙にドーサ引きを施し、その上から細目の雲母に膠と布海苔の混合液を加えたものを薄く塗布する方法が、打紙の効果を最も良好に発揮することが明らかとなった。さらに、線描に用いる墨へ膠水を加えることで、「墨溜まり」などの原本特有の表現が再現できることも確認された（図2）。一方、現存する原本に認められる粒子の粗い雲母については、制作当初の下地処理に由来するものか、あるいは後世の修理時に総裏紙から移行したものかについて、なお検討の余地が残されている。

また、《東征伝絵巻》に描かれる山水画障子には、北宋時代の画風との関連が指摘される山水表現が数多く認められる。その表現的特徴を把握するため、台北故宫博物院開院100周年特別展において、《溪山行旅図》をはじめとする北宋山水画の実地調査を実施した。

令和8年度は、全五巻の上げ写しの完成と原本作風の習得を引き続き進めるとともに、唐招提寺執事長との協議を踏まえ、原本が現存しない場面（和上が失明に至る場面など）の復元制作に重点的に取り組む予定である。また、原本と同寸法の料紙サンプルを作成し、打紙実験の再検証を行うことで、より原本に近い料紙再現技法の確立を目指す。

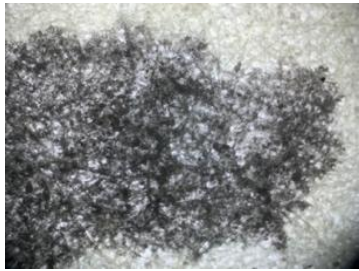
		
打ち紙前、墨	打ち紙後、墨	打ち紙後、墨+膠

図 1



図 2



図 3



図 4